

研究ノート

創世記一章と二章における地と水について

津村俊夫

筆者は、一九八六年七月から約一年八カ月の間、英国のケンブリッジにあるティンデル聖書学研究所の招聘により「創世記一―二章の研究」プロジェクトに参加する機会を与えられた。このプロジェクトは、D・J・ワイズマン教授、A・R・ミラード教授、K・A・キッチン教授の三人の学者によって提案され、英国の福音的な諸教会の祈りと支援によって計画されたものであるが、一九八六年の秋に筆者のほかに二人の若手の学者がフルタイムで加わり、本格的に共同研究が始まった。各人は自分の研究領域に応じたテーマを選んで、毎月の例会で研究の進み具合を発表した。

筆者の研究テーマは、当初「創世記一―二章に見られる言語接触の現象」であったが、研究が進むにつれて創世記一章と二章における「地と水」に関わるいくつかの語および句の語源研究へと導かれていった。研究成果は、はじめの予定では複数の学者による論文集に発表することになっていたが、単著のモノグラフ (*The Earth and the Waters in Genesis 1 and 2: a linguistic investigation* [Journal for the Study of the Old Testament, Supplement Series 83]) として Sheffield Academic Press からつい最近(一九八九年)出版された。

「地と水」の研究は、創造という神学を中心主題に関わるものであるが、筆者の研究はヘブル語のいくつかのキー

ワードの言語学的な考察を行なったものであって、旧約聖書全体に基づいた「創造」の体系的な記述を目的としたものではない。本書の多くの部分は語源学の問題を扱っているが、それは決して語源研究が釈義において最終的な決定権を持っているからではなく、従来の聖書釈義が非常にしばしば誤った(または不十分な)語源解釈に依存しているという事実があり、これらの語源を再検討する必要があるからである。語源を論じるに際しては、古代オリエントからの最新の聖書外資料に見られる言語的情報(エブラ語、アッカド語、ウガリト語、アラム語ほか)を一次資料に直接当たりながら用いた。

言語学的アプローチのもう一つとして、本書では最近注目されている談話分析の方法を意識的にとりいれて、R・E・ロングエーカーの方法に従って、文を越えるより大きな言語の単位に注意を払うことを心掛けたつもりである。しかし、創世記一―四章の全体的な談話分析は別のモノグラフを待たなければならぬ。

本書で扱った内容の概略と結論は次のとおりである。

A 語源研究

(一) *tohuwabohu*

ヘブル語の *tohuwabohu* は、伝統的には「形なく、むなしく」(口語訳)、「形がなく、何もなかった」(新改訳)とか“without form and void” (RSV) / “formless and empty” (NIV) と翻訳されてきたが、それが、意味するところは「創造」に直接対立するところの原初の「混沌」であるとはしばしば主張されてきた。最近の新共同訳や関根

訳の「混沌としていた」もこのあらわれであると言えよう。

ヘブル語の *tohu* はセム語の語根 **thw* に基づく語であり、本来「荒野」を意味する。また *bohu* は **bhw* 「空である」「何もなし」に基づく語であると考えることができ、*tohuwabohu* に形態上対応していると考えられるウガリト語の *tu-abi-[u]* は、アッカド語の *nabalkutu* 「異常である」(to be out of order) やフルリ語の *lapsu* (*humme*) 「貧乏」(to be poor) との関連から、「不毛である」(to be unproductive) というような慣用的な意味を持つと考えられる。

tohu ㉔(「荒野」(“desert”)/ ㉑「荒野のふいふ何もなすう」(“a desert-like place”, i. e. “a desolate or empty place” or “an uninhabited place”)/ ㉒「何もなすう」(“emptiness”) を意味する。*tohuwabohu* は「不毛な状態」(エレシヤ四・23)とか「荒涼とした状態」(イザヤ三四・11)を指す表現であり、創世記一・2でも同様に「不毛で何もない状態」を指していると考えるべきである。後者の場合、他の二例とは違い、地・国に対する神の裁きの結果もたらされた状態というのではなく、創造された地の最初の状態を示している。その地とは、植物も動物もなく人も住んでいない「裸の状態」の地である。

創世記一・2の *tohuwabohu* は、「秩序」に対立する「混沌」ではなく、「不毛な、人の住んでいない」「何もなし」ところであった地の状態を指しているのである。詳しくは、関根正雄教授献呈論文集(『聖書学編集23』、山本書店、一九八九)の拙著を参照。

(二) *tehom*

a バビロニア的背景

H・グンケルの *Schöpfung und Chaos in Urzeit und Endzeit* (一八九五) 以来、多くの聖書学者は、創世記一章二節の *tehom* がバビロニアの「創造」神話であるエヌマ・エリシュの最初の海の女神ティアマトと関係があると考えてきた。しかし、ヘブル語の *tehom* がアッカド語の神名 *Tiamat* の借用語であると結論することは音韻論的に不可能である。また、アッカド語の *tiamtum, tamtum* は通常「海」「大海」という普通名詞であり、ヘブル語の *tehom* が *Tiamat* と同一の語源 **tiam-* に遡るからと言って前者が後者に神話的に依存していることはできない。

嵐の神マルドゥクと海の女神ティアマトとの戦い(所謂「混沌との戦い」(Chaoskampf))のモチーフは、メソポタミア固有のものであると単純に考えることはできないし、エヌマ・エリシュ自体メソポタミアのより古い伝承を取り入れている。それゆえ、エヌマ・エリシュの図式が創世記の記述の直接の背後にあると考えることは適切ではない。海はメソポタミアの文書記録の最古の段階から神格化されているが、他方、後期の創造物語の中で海が神格化されていない場合があり、戦いのテーマとはなんの関わりもない例がある。いくつかの後期の物語で世界の創造が戦いのテーマとは全く関連づけられていないことからして、戦いのテーマと無関係であったより古い段階の創造物語が発展して必然的に戦いのテーマと結び付けられるようになったと仮定する理由はない。古代メソポタミアには一つ以上の「創造」伝承が存在していたのである。

b カナンの背景

エヌマ・エリシュでは嵐の神と海との戦いのモチーフが世界の「創造」の物語に統合されているのに対して、ウガリトの嵐の神バルと海神ヤムとの戦いは世界の「創造」とは無関係である。にもかかわらず、この「混沌との戦い」のモチーフは古代オリエントの創造物語の普遍的パターンであるかのように、しばしば考えられている。例えば、「デイは、創世記一・2の *tehom* が、創造のテーマと関係している(と彼が考える)未知のより古いカナンの竜神話(dragon myth)にまで遡りうる」と提案し、その語がカナン神話の神名の非人格化であるとする。しかしながら、彼の仮説は以下の理由によって否定される。

- (i) *tehom* は「カナン語」固有の語彙であるというよりはむしろ共通セム語の **tiam-* に遡る語である。
 - (ii) *tehom* は固有名詞の非人格化ではなく、ウガリト語、アッカド語、エブラ語に見られるように、通常は普通名詞として用いられている語である。
 - (iii) ウガリトの混沌神話に見られるカナンの海竜はヤムであって、タハム(*Taham*)ではない。
 - (iv) ウガリト神話ではバルではなく、エルが創造神である。
 - (v) 創世記一・2には「海」(*yam*)は出ていない。
- c **thm* の語源

形態論的にはヘブル語の *tehom* はアッカドの神名 *Tiamat* よりもむしろウガリト語の *thm* に対応している。女性形語尾 *-(a)t* を伴うアッカド語 *hāmūt*、アラビア語 *tihāmat*、エブラ語 *tiam(a)um* は、ヘブル語 *tehom* やウガリト語 *thm* と同様に、初期の時代から普通名詞として用いられ共通セム語の **tiam-*「海」に遡る。またヘブル語の *tehom* は形態論的にはウガリトの神名 *Taham* よりもむしろ考えられる。北西セム語では **yamm-* が普通「海」を意味する語であり、*tehom* は通常、地下の水を指し、アッカド語の *apsu* に対応する。

以上のことから、ヘブル語の *tehom* がアッカド語のティアマト神やウガリト語のタハム神と同一語源であるからといって、それがそのような神名の非人格化であると考えられることは適切でないことが分かる。

(三) *ed*

ed は、古くは七十人訳ギリシア語聖書に見られるように「泉」と訳されたり、アラム語訳のタルグムでの「雲・霧」と訳されたりした。また、現代訳では、「mist」(KJV/RSV/NEB 脚注)/「flood」(RSV 脚注/NEB)、「water」(JB)/「streams」(NIV) 等と翻訳されてきた。しかし、この語に関して満足の行く語源はセム語からは与えられていない。次の二つの説明が有力な可能性として考えられる。

- a アッカド語を介して西セム語に入った、シュメール語からの借用語
これまで二つの説が提案されている。

(i) アッカド語 *eda* “flood” を媒介とするシュメール語 *e-de-a* の借用

(ii) シュメール文字 ID のアッカド語読み *id* “river” の借用

最近の傾向は後者のオルブライト説に傾いているが、いくつかの理由(省略)で、前者のスパイザー説が支持されるべきである。これにしたがうならば、ヘブル語の *ed* はアッカド語からの借用語 *eda* (→ *eda*) の短縮形と説明できる。

- b 直接西セム語に入った、シュメール語からの借用語

シュメール語の *id* (A. ENGLUR) がカナン語に *ed* として借用されたかどうかは定かではないが、ヘブル語の *ed* (創一・6) がシュメール語の *e-de* “high water” の借用語である可能性はある。他方、*edo* (ヨブ二六・27) はアッカド語 *eda* を媒介とするシュメール語 *e-de-a* (A.D.E.A) からの借用語であると考えられることができる。

(四) *eden*

この語の語源として次の三つの説明が可能である。

- a アッカド語を介して西セム語に入った、シュメール語からの借用語

ヘブル語の *eden* はシュメール語の *edin* に基づくアッカド語の *edinu* の借用であると通常考えられているが、アッカド語に / / という音素が存在していないのでこのことは不可能である (*edinu* は多分シュメール語 *edin* の「セル語化」された呼び名であろう。)

- b 直接西セム語に入った、シュメール語からの借用語

シュメール語に / / という音素が存在していなかったと考えられるので、シュメール語 *edin* が直接カナン語の中に *edin* として借入されたと考えることはできない。また、シュメール語 *edin* の意味「平原、ステップ」は創世記二章のコンテクストに合わない。

- c 共通セム語

アラム語(フェヘリイェ碑文)、ウガリト語、古南アラビア語、およびアラビア語(動詞 *adana*) の情報から判断すれば、セム語の語根 **dn* は「豊かな水を与える」という意味を持っていたと推定できる。それゆえ、ヘブル語の名詞 *eden* は「豊かな水があるところ」を意味する共通セム語の語彙であると結論することができる。

B 構造分析

(一) 創世記一章

tohuwāwōhu が「不毛な、人の住んでいない」何もないところであった地の状態を指しているという語源解釈は、

創世記一章の文学的構造からも支持できる。二節において著者は、「天」ではなく、読者/聴衆が位置している「地」に焦点を当て、その「地」が「まだ」彼らがよく知っている地ではないと語っている。彼らがよく知っている地とは、植物が生え、動物と人間がいる「地」である。従って、著者はそれらが神の創造の業によって存在するようになったと語るのである——即ち、神の命令によって、三日目に「まだ生産的でなかった」地が動物を生じさせるようになり(11節)、六日目に「まだ何も住んでいなかった」地が植物を生じさせるようになり(24節)、そこに人間が創造される。三日目と六日目はこの創造物語の枠組みの中でクライマックスに位置しており、グランド・クライマックスは六日目の人間の創造にある。

このように、創世記一章一節—二章三節の創造物語は、神が人間を「神のかたち」に創造し、人(男・女)のために「住むことのできる生産的な」地を備えられたことを語っているのである。神が「全てのもの」の創造者であることは、一章一節の「天と地」というメリスマスによって冒頭で主張されている事柄であって、一章二節に基づく「無からの創造」(*creatio ex nihilo*)の「無」の解釈に依存しているのではない。

(二) 創世記二章

創世記二章四節以降の談話構造は創世記一章一節—二章三節のそれと類似している。即ち、両者とも、(一)時間記述(一・一—二・四)、(二)場面(setting)(一・二—二・五—六)、(三)述べられた最初の出来事(the first stated event)という構造を持っている。一章二節と同じく、二章五—六節は地の初めの状態がまだ生産的ではなく、「水」と密接な関係があったことを述べている。

構造的には五—六節は二つに分けられる。(A)五a—五c節は、雨が降らないために野生の植物も「まだ」生えていないような不毛な「地」(*eres*)のことを述べており、(B)五d—六b節は、より限定された領域である「土地」(*adamah*)に関して、「それを耕す人がいない」ことと、そこが地下からの「水」(*et*)によって浸されていることを述べている。即ち、主題が植物から人と水に、舞台が「地」から「土地」に移っているのである。その後、舞台はさらに限定されて「エデン」に、そしてその中にある「園」へと移る。

前半(A)で述べられている地の「不毛さ」と後半(B)で言及されている「人がいない」状態は、創世記一章一節で *tohuwabohu* と説明された「地」の「不毛な、人の住んでいないような」状態と本質的に同じである。

C 地と水の関係

(一) 創世記一章

「地」は一章一節で「天」と対立的な対になっており、天の下にあるもの全てを指す。一章一—二節の宇宙観は「天—地—海(*yam*)」という三分法ではなく、「天—地」というメリスマスの対語によって示されているように、二分法であり、一章二節の *tehom* は通常は「地」の一部である「水」(ヘブル語の *eres* と *tehom(ot)* は抱撰関係—*hyponymous*—にある対語である)を指していると考えられる。従って、ここに「三分法」の宇宙観を想定して、「混沌の海」が神の創造の業の外に位置づけられると考えることは適切ではない。

(二) 創世記二章

二章五—六節では、一章二節とは違い、上からの水である雨と下からの水である *et* が、地の最初の状態を描写す

るのに用いられている。地下からわき出る水 *ed* は *tehom* とは違い、「地」(*eres*)の一部である「土地」(*adamah*)の全面を(洪水のように)おおっていたのである。この水はエデンから「出てくる」川の流れの水とは区別されている。二章五―六節の問題は、水が欠乏していることではなく、地下から豊かにわき出る水を適切にコントロールする「人」がいないことにあるのである。この「水が豊かにある状態」は、「エデン」の意味(豊かな水のある所)につながる。

D、神と水

(一) 雨を降らせる神

アダド、ハダド、バアル等の雨の神は、「豊かな水の与え主」と呼ばれる。この神は同時に、「川の水の取締人」とも呼ばれている。創世記二章五―六節の「神である主」も雨を降らせる神(二・五)であるとともに、地下からの水を取り締まる神であったと考えられる。それは、彼が豊かな水のある所エデンに園を作られた(二・8以下)とき「土地」(*adamah*)をすっかりおおっていた *ed* 水を灌漑しなければならなかったはずだからである。もちろん、彼は「水の取締人」以上の神で「地と天」(二・4)即ち全宇宙の創造者である。

(二) 水による世界の始まり

一章二節の「水による世界の始まり」は宇宙の基礎的要素が水であるという普遍的な理解を反映しているとも考えられるが、創世記の記述は他の古代伝承における「創造」神と水の関係とは異なっている。

(三) 「創造」神と水

a マルドゥク、エル、エア

マルドゥクとバアルとは、共に嵐の神である点では似ているが、前者が「創造」神であるのに対して、後者はそうではない。ある学者は、ウガリトの「創造」神エルと水 *hmt* の関係こそマルドゥクとティアマト(*Tiamat*)の関係と比べるべきであると主張する。しかし、マルドゥクがティアマトの屍を切り裂いて造ったのは「天」と「地」とであって、地下の水を含んでいないし、彼の住居は水とは関係がない。それに反して、エル神は「二つの *hmt* 水の流れの中」に住んでいると言われている。バビロニア「創造」神話のエヌマ・エリシュでは、水と関わりがあるのはマルドゥク神ではなくエア神であり、エアは地下の水の領域であるアプスに住んでいる。

b エル神とエア神との類似性

エア神はシュメールのエンキ神と同じであるが、多くの点でウガリトのエル神と似ている。

- (一) 生き物の創造者
- (二) 宇宙の創造者
- (三) 神々の父
- (四) 人類の父
- (五) 水の近くまたは中に住む神

しかしながら、両者には相違点もある。エル神の住居は「二つの *hmt* 水」(多分、「天」と「大海」と関係があるのに対して、エア神の住居は地下の大海のみに関わっている。エルはウガリトの最高神であるが、エアはメソポタミアの伝統的な三柱の最高神(アヌ、エンリル、エア)のうちの一つで、宇宙の三つの領域のうち一つしか支配

していない。この点において、ウガリトの「創造」神エルは、メソポタミアのエア神より、創世記の神エロヒムにもっと類似している。しかし、聖書の神エロヒムは、ウガリトのパンテオンの主神エルとは異なり、存在する唯一の神であり、「天と地」(創世記一・1)即ち全宇宙の創造者である。

(筑波大学・助教、聖書神学舎・教師)